

県単道路改良事業一般県道良川磯辺線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

中能登町

小竹へブタB遺跡

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

おだけ
小竹へフタ B 遺跡

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は小竹ヘブタB遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は鹿島郡中能登町小竹地内である。
- 3 調査原因は県単道路改良事業一般県道良川磯辺線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成20(2009)年度から平成22(2011)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査にかかる費用は石川県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査は平成20年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は以下のとおりである。

期 間 平成20年10月27日～平成21年(2010)1月15日
面 積 700㎡
担当課 調査部関係調査グループ
担当者 谷内明央(主任主事)、坂下博晃(嘱託調査員)
- 7 出土品整理は平成21年度に調査部関係調査グループが担当した。
- 8 報告書の刊行は平成22年度に実施し調査部関係調査グループが担当した。執筆は第1章が谷内明央、その他の執筆および編集は坂下博晃(関係調査グループ嘱託調査員)が行った。
- 10 発掘調査には下記の機関、個人の協力を得た。

石川県土木部中能登土木事務所、中能登町教育委員会、中能登町小竹地区
- 11 調査に関する記録と出土品は財団法人石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位および座標については工事にかかわる既存の基準点を使用した。
 - (2) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
 - (3) 遺構番号は調査時には算用数字を順に振ったが、報告では遺構番号を振り替えた。遺構の性格として以下の略記号を使用し、その後には算用数字を順に振り遺構番号とした。

S B : 掘立柱建物
S D : 溝
S E : 井戸
S K : 土坑、竪穴状遺構
P : 柱穴・小穴
S X : 不定形遺構、不明遺構

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構	6
第3節 遺物	8
第4章 総括	23

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第9図 SE1遺構平面・エレベーション図	
第2図 遺跡の位置	3	SE3平面・断面図 (S=1/20)	15
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)	3	SE2・SK1, P6, SK3遺構平面・断面図	
第4図 調査区全体図 (S=1/400)		(S=1/20,1/40)	16
第4図 調査区断面図 (S=1/40,1/60)	10	第11図 SK5・6, SK4, SD1・SE3, SX1遺構平面・断面図	
第5図 1～3区遺構平面図 (S=1/100)		(S=1/40)	17
遺構断面図 (S=1/40)	11	第12図 SK8遺構平面・断面図 (S=1/30)	18
第6図 3～5区遺構平面図 (S=1/100)		第13図 出土遺物実測図 1	19
遺構断面図 (S=1/40)	12	第14図 出土遺物実測図 2	20
第7図 5～7区遺構平面図 (S=1/100)		第15図 出土遺物実測図 3	21
遺構断面図 (S=1/40)	13	第16図 土師器皿の形態	23
第8図 1区 掘立柱建物平面			
エレベーション図 (S=1/50)	14		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4	第3表 石製品・木製品観察表	22
第2表 土器陶磁器観察表	22	第4表 中世土器・陶磁器組成表	24

図版目次

図版1 遺跡周辺の景観		図版6 SK7遺構完掘状況、P1柱根出土状況、P2柱根出土状況、P14柱根出土状況、SK8東西断面・南北断面
図版2 遺跡完掘状況、SK8遺構完掘状況		図版7 SK8刳物出土状況、SK8珠洲焼出土状況、SK8遺物出土状況、SK8土師器皿出土状況①②③④⑤
図版3 1区遺構完掘状況、2区遺構完掘状況①、2区遺構完掘状況②、3区遺構完掘状況③、4区遺構完掘状況④、4区遺構完掘状況⑤、5区遺構完掘状況⑥		図版8 出土遺物1
図版4 6区遺構完掘状況、7区遺構完掘状況、8区遺構完掘状況、SE1遺構完掘状況、SE2・SK1遺構完掘状況、SE2遺構完掘状況、SE2・SK1新断面、SE1曲物出土状況		図版9 出土遺物2
図版5 SE3遺構完掘状況、SE3曲物出土状況、SE2・SK1・SE3新断面状況、SK3遺構断面、SK4遺構断面、SK6・5遺構断面、SK6・5遺構完掘状況、SK7遺構断面		図版10 出土遺物3

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

石川県道325号には中能登町（旧鹿島町）井田地区から小竹地区を経て富山県水見市に至る区間が存在する。この区間は自動車のすれ違いにも苦勞するほど幅員が狭いため、石川県土木部道路建設課（以下、「土木」）は県単道路改良事業一般県道良川蔵辺線を計画した。平成19年11月15日付で土木は埋蔵文化財分布調査を石川県教育委員会文化財課（以下、「文化財課」）に依頼し、重機による試掘の結果、調査区域の一部で新規の埋蔵文化財包蔵地である小竹へプタB遺跡が発見された。同年11月20日付で文化財課は分布調査の結果を土木に回答し、双方協議の結果、工事の影響が遺跡に及ぶ箇所については発掘調査対象とすることで合意がなされた。土木は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）に発掘調査を平成20年4月1日付で委託した。

第2節 調査の経過

現地調査 平成20年10月27日に土木・文化財課・埋文センターとの間で現地協議が行われ、調査区の範囲や調査着手時期などについて確認した。11月17・18日に表土除去を行い、20日から作業員が調査に参加した。25日から遺構検出、12月1日から遺構掘削を行い、順次写真撮影・実測を行った。17日に空中写真測量、18～24日に補足調査、25日に撤収、翌年の1月15日に現地引き渡しを行い、現地作業を完了した。

出土品整理 平成21年度に文化財課は埋文センターに出土品整理を委託し、8月25日から9月11日にかけて行った。整理内容は記名・分類・接合、実測・トレースと遺構実測図のトレースであり、県関係調査グループが担当した。

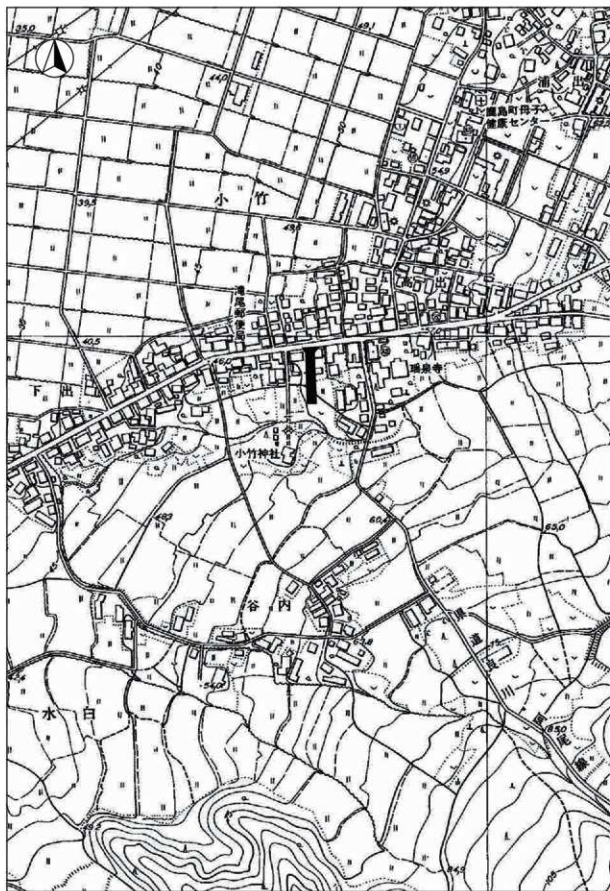
報告書刊行 平成22年度に文化財課は埋文センターに報告書の作成・編集・刊行を委託し、県関係調査グループが担当した。

◎調査体制（平成20年度）

調査期間	平成20年10月27日～平成21年1月15日（現地調査）
調査主体	（財）石川県埋蔵文化財センター（理事長中西吉明）
総括	黒崎寄作（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長）
総務	釜視利雄（総務グループリーダー）
調査	湯尻修平（所長）
	三浦純夫（調査部長）
担当	藤田邦雄（国関係調査グループリーダー）
	谷内明央（国関係調査グループ主任主事）
	坂下博晃（国関係調査グループ嘱託調査員）

◎整理体制（平成21年度）

整理期間	平成21年8月25日～同年9月11日
調査主体	（財）石川県埋蔵文化財センター（理事長中西吉明）
総括	黒崎寄作（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長）
総務	釜視利雄（総務グループリーダー）
整理	湯尻修平（所長）
	三浦純夫（調査部長）
担当	伊藤雅文（県関係調査グループリーダー）
	谷内明央（国関係調査グループ主任主事）



第1図 調査区位置図 (S = 1/2,500)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

小竹ヘブタB遺跡は石川県鹿角郡中能登町小竹地内に所在する。中能登町は平成17年3月1日に鳥屋町、鹿西町、鹿島町が合併して誕生した。

中能登町は能登半島のほぼ中央に位置しており、面積は89.3平方km、人口は19,674人である。(平成22年2月1日現在)北は七尾市、西は志賀町、南は羽咋市と石動山系を挟み富山県見守市と接している。

地形は七尾南湾から南西に延びる邑知湯地溝帯の平野部があり、その西の眉丈山系と東の石動山系からなる。石動山を源流とする二宮川は地溝帯を北流して七尾西湾へ流れ、同山系を水源とする長曾川は地溝帯を南西に貫流して羽咋市の邑知湯に注いでいる。石動山麓は急峻な地形の眉丈山麓に比べて緩やかな傾斜の扇状地が形成されている。集落域は山麓部の扇状地上や二宮川、長曾川の自然堤防上に営まれ、沖積低地は水田域となっている。主要な交通路は眉丈山側の西往來(外浦街道)と石動山側の東往來(内浦街道)からなり、現在は集落を避けるようにして、直線的な県道につけかえられているが、以前は集落を縫うようにして、山裾を通っていた。

遺跡は石動山麓の緩斜面上に立地して、現在の小竹集落と重なるように形成されている。



第2図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡は眉丈山、石動山系の丘陵部、山麓部に多く展開している。邑知湯地溝帯中央部の遺跡の密度は一見疎にみえるが、実際は分厚い扇状地堆積物に覆われていて、全容は明らかではない。しかし近年、低地においても人々の営みがわずかながら窺い知れるようになった。

縄文時代 山麓の台地上や扇頂部に多いが、地溝低地にも確認されている。調査された遺跡は徳前C遺跡(69)、藤井A遺跡(58)、福田原山遺跡がある。いずれも中期に中心をおく遺跡が多いが、遺構は不明確である。

弥生時代 久江ツカノコシ遺跡(47)では平地式建物1棟を検出している。また小田中おぼたけ遺跡(45)では大型石包丁が採集されている。

古墳時代 邑地溝帯を挟んで眉丈山・石動山の両山系の丘陵部や山麓部に多くの古墳が築造される。石動山系に限れば、前期では前方後方墳の小田中亀塚古墳(54)、円墳の小田中親王塚古墳(55)、中期には帆立貝形の水白鍋山古墳(31)、前方後円墳の小竹ガラボ山古墳(25)があり、いずれも全長50m前後かそれ以上の大型墳である。集落跡では久江ツカノコシ遺跡で中期の堅穴建物3棟を確認している。

奈良・平安時代 徳前C遺跡では奈良時代前期の掘立柱建物、櫓、井戸、土坑、溝などを検出している。久江サザミヤシキ遺跡(48)では10世紀の溝に区画されたなか掘立柱建物が検出されている。遺物では灰釉陶器や緑釉陶器といった施釉陶器のほか銅製帯金具や皇朝十二銭のひとつである「延

喜通室」が出土していることが特筆される。

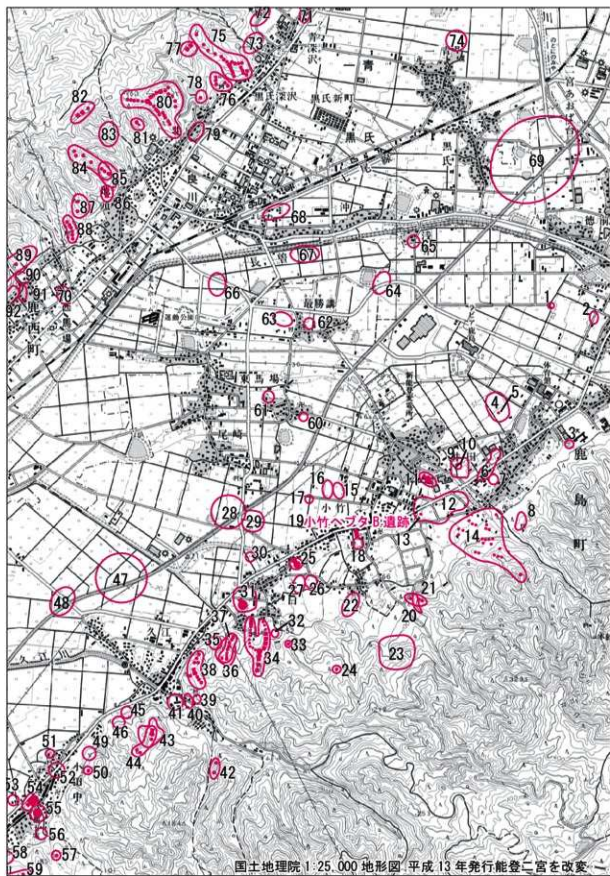
中世以降 水白モンシヨ遺跡では、12世紀後半から13世紀にかけての掘立柱建物、堅穴状遺構、土坑、溝などを検出している。遺物は土器・陶磁器のほかに木製品も豊富でなかでもコロボシなどの農具もみられる。久江サザミヤシキ遺跡では、中世前期(13世紀)の井戸が検出され卒塔婆や呪符木簡が出土している。小竹シャミドウ遺跡では2×1間の掘立柱建物に15世紀中葉から16世紀前葉を中心とする遺物が出土している。最勝講古瀬戸遺跡では古瀬戸の瓶子一對が耕地整理作業中に発見されている。戦国期になると小竹の地名が文献上に確認できる。気多神社免田指出案によれば、「小竹村 見しろ村ヨリ 八貫文」とあって、一ノ宮気多社の衆徒方へ毎年2月役として8貫文が納められていたことがみえる。また遺跡の南西にあたる、小竹神社境内には明応5年(1496)銘の五輪塔所刻板碑があり、その年代を考える上で貴重である。

第1表 周辺の遺跡

No	遺跡番号	名称	立地	時代	No	遺跡番号	名称	立地	時代
1	34090	芦川土場遺跡	扇頂部	奈良～平安	47	34043	久江ツカノコシ遺跡	平地	縄文～中世
2	34089	芦川田遺跡	扇頂部	古墳	48	34042	久江サザミヤシキ遺跡	平地	平安～中世
3	34084	井田山下遺跡	平地	古墳	49	34033	小田中寺遺跡	台地	中世(鎌倉・室町)
4	34083	井田フカダ遺跡	平地	縄文	50	34032	小田中1号横穴	丘陵	不詳
5	34082	井田江塚古墳	平地	古墳	51	34031	小田中観音遺跡	台地端	古墳
6	34079	井田佐味太郎遺跡	平地	弥生～古墳	52	34030	小田中園田日遺跡	扇頂部	弥生
7	34078	井田テラガイ遺跡	山麓	縄文・弥生・平安	53	34025	小田中観音遺跡	台地	古墳
8	34077	井田観野神社経塚	丘陵	中世	54	34026	小田中鳥塚古墳	台地	古墳
9	34081	井田中世遺跡	平地	中世	55	34027	小田中新王塚	台地	古墳
10	34080	井田長次郎前穴田遺跡	平地	中世	56	34028	小田中寺屋敷遺跡	扇頂部	縄文
11	34073	井田岡野山1・2号古墳	丘陵端	古墳	57	34029	藤井古墳	段丘	古墳
12	34075	井田堂塚遺跡	山麓	縄文・古墳・奈良・中世	58	34022	藤井A遺跡	丘陵地	縄文
13	34074	井田堂塚古墳	台地端	古墳	59	34021	藤井橋穴群	丘陵中腹	古墳
14	34076	井田1～30号墳	丘陵	古墳	60	34068	小田中屋内遺跡	平地	中世
15	34066	小竹中ノ坪遺跡	平地	不詳	61	34069	宮田遺跡	平地	不詳
16	34065	小竹南ノ坪遺跡	平地	古墳	62	34071	最勝講古瀬戸遺跡	平地	中世(鎌倉・室町)
17	34067	小竹経塚	台地端	中世	63	34070	最勝講古瀬戸遺跡	平地	古墳
18	34064	小竹ヘタ遺跡	平地	縄文	64	34072	合城跡	平地	不詳
19	34063	小竹ヘタ山遺跡	丘陵	縄文	65	34091	五井遺跡	扇頂部	古墳
20	34062	小竹の窪の穴	丘陵中腹	不詳	66	32004	坐田中世遺跡	平地	中世
21	34063	小竹谷内山1～3号墳	丘陵	古墳	67	32005	良川沖遺跡	平地	中世
22	34060	小竹シャミドウ遺跡	平地	平安～中世	68	32003	良川遺跡	平地	不詳
23	34061	小竹経塚	山麓	不詳	69	32001	徳村C遺跡	平地	縄文～中世
24	34052	小竹横穴(風の穴)	丘陵中腹	不詳	70	36071	西馬場遺跡	扇頂部	縄文
25	34057	小竹カラボ山古墳	丘陵	古墳	71	32022	深天遺跡	平地	不詳
26	34059	小竹C遺跡	平地	縄文	72	32020	深天中学校校庭遺跡	平地	不詳
27	34058	小竹平遺跡	山麓	弥生～奈良	73	32019	一貫A遺跡	平地	弥生・古墳
28	34055	水白モンシヨ遺跡	平地	弥生～中世	74	—	一貫B遺跡	平地	弥生・平安
29	34056	小竹神社跡	平地	不詳	75	32015	栗氏深沢A古墳群	丘陵	古墳
30	34048	水白野原遺跡	丘陵端	縄文	76	32016	栗氏深沢B古墳群	丘陵	古墳
31	34049	水白鎮山古墳	丘陵端	古墳	77	32017	栗氏深沢C古墳群	丘陵	古墳
32	34054	水白萩の谷遺跡	平地	平安～中世	78	32018	栗氏深沢D1号墳	丘陵	古墳
33	34053	水白橋穴	丘陵中腹	不詳	79	32014	良川北遺跡	丘陵端	古墳・平安
34	34051	水白円山1～25号墳	丘陵	古墳	80	32011	良川北A古墳群	丘陵	古墳
35	34045	遺跡不明遺跡	丘陵	江戸	81	32012	良川北B1号墳	丘陵	古墳
36	34046	藤が野遺跡	丘陵中腹	中世(室町)	82	32013	良川北C古墳群	丘陵	古墳
37	34047	久江ウシロタン1～9号墳	古墳	古墳	83	32010	北観音堂遺跡	丘陵斜面	平安
38	34044	久江宮山1～8号墳	丘陵	古墳	84	32007	良川白島山A古墳群	丘陵	古墳
39	34041	久江B遺跡	丘陵	古墳	85	32009	白比古神社経塚	丘陵端	中世(室町)
40	34040	久江遺跡	台地端	平安	86	32008	良川白島山B古墳群	丘陵	古墳
41	34039	久江ヤンタン遺跡	段丘	縄文・平安～中世	87	32006	地蔵セントウ古墳群	丘陵	古墳
42	34038	久江橋の穴橋穴群	丘陵中腹	不詳	88	32005	地蔵フタダ古墳群	丘陵	古墳
43	34037	久江寺ヶ谷遺跡	丘陵	不詳	89	36070	西馬場1～5号墳	丘陵	古墳
44	34036	久江オハヤシ山1～4号墳	丘陵端	古墳	90	36069	中火門川遺跡	谷地・平地	縄文・古墳～平安
45	34035	小田中おたけ遺跡	丘陵端	古墳	91	36068	扇田遺跡	平地	平安
46	34034	小田中観音堂遺跡	台地端	古墳	92	36067	中火門遺跡	丘陵端・台地	古墳～中世

引用・参考文献

- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
 石川県教育委員会 1995 『歴史の道調査報告書 第二集 能登街道1』
 角川日本地名大辞典編纂委員会編 1981 『角川日本地名大辞典 17 石川県』
 安 英樹ほか 2003 『久江ツカノコシ遺跡』 石川県教育委員会 御石川原埋蔵文化財センター
 柿田祐司ほか 2007 『久江サザミヤシキ遺跡』 石川県教育委員会 御石川原埋蔵文化財センター
 鹿島町役場 1966 『鹿島町史 資料編』
 1982 『鹿島町史 資料編(続) 上巻』



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

0 1000m
(1:25,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要(第4図)

調査区は県道良川磯辺線の予定路線内で設定した。調査対象面積は700㎡である。調査区のグリッドは計画道路の中心に任意の杭を10メートル毎に設定して、県道側から1区～8区と呼称した。

調査区の旧状は宅地と一部畑地であり標高51m前後、遺構検出面までは地表下40～70cmである。遺構面は1区50.9m、3区51.1m、6区50.3mを測り、調査区中程で一番高く微高地状になっている。微高地上では遺構密度も比例して高く、6区～8区にかけては遺構面が低くなるにつれて遺構密度も希薄になる。農道を挟んだ8区においては谷地形となっているため遺跡が途切れることが確認された。

基本層序は1層が表土(濁灰色砂質土)→2・3・4・11・18・19層が近世・近代の盛土・整地土(濁灰色～暗灰色の砂質土ないし粘質土)→10・17・21・26層がベース土(黄灰色砂質土ないし砂礫土)である。包含層は近現代の盛土・整地土によって削平されており、調査区西壁では確認できなかった。覆土は暗灰褐色か褐灰色の砂質土ないし粘質土である。

遺構は掘立柱建物1棟、井戸3基、土坑7基、竪穴状遺構2基、溝、小穴を検出した。なかでも、竪穴状遺構や土坑が目立つ。柱根が残る柱穴も多くみられたが掘立柱建物を復元できたものは1棟にとどまった。井戸は石組のタイプと石組と曲物がセットになったタイプを検出した。石組はどれも1段程度しか確認されず、井戸とするには検討を必要とするが、ここでは井戸として報告する。

遺物は土器・陶磁器・石製品・木製品がある。図示したものは弥生時代から近世にかけてと幅広いが、遺構内での弥生土器・土師器・須恵器は混入したものとみられ、中世の遺構がほとんどである。時期は概ね13世紀から15世紀前半である。

第2節 遺 構(第4～12図)

掘立柱建物

SB1(第8図) 1区において検出した。試掘調査の際にトレンチ中ほどで径25cmの柱穴に柱根が確認されたことをふまえ、側柱建物を復元した。規模は南北2間(5.0m)、東西は調査区外であるために1間のみ確認できた。柱間は2.4～2.5mを測る。柱穴平面は楕円形で規模は長軸で0.5～1.2m、短軸で0.3～1.0mで柱穴は規模により差がある。出土遺物はなく時期はわからないが、柱穴の規模や柱間から中世後半頃としたい。

井戸

SE1(第9図) 1区において検出した。石組は一段しか確認できなかった。掘方東側は調査区外となるものの、現長の長軸で1.75mの隅丸方形と考えられる。深さは検出面より0.5mを測る。礫は内面に平坦面がくるように据えられている。覆土は暗灰褐色砂質土である。遺物は石臼(第14図29)、図示していないが中世土師器皿が出土している。

SE2(第10図) 2区において検出した。SK1にきられる。平面形は長軸1.3m、短軸で1.0mの楕円形を呈する。井戸側は自然石を利用した石組、水溜に曲物が使われている。類例は羽咋市四柳白山下遺跡、大町ダイジグウ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡など中世後半の近辺の集落跡で確認できる。石組は1段で礫は上部と内面に平坦面がくるよう据えられている。曲物は口径44.0cm、器高38.9cmを測る。堀方埋土は3層に分層することができ、暗灰褐色粘質土を少量含むベース土で埋められている。石組の下には暗灰褐色の粘質土を確認した。覆土は黄灰色砂礫土、ベース土は黄灰・青灰色の砂礫土である。遺物は中世土師器皿(第13図16)、図示していないが珠洲の甕、越前の甕が出土している。

SE3(第9図) 2区において検出した。SD1に切られる。井戸側は自然石を利用した石組、水溜として曲物が使われている。平面形は長軸1.35m、短軸1.1mの楕円形を呈する。深さは石組上端より0.5mを測る。曲物は口径35.0cm、器高16.7cmを測る。石組の残存状況は極めて悪く原位置を保っていない部分があると思われる。覆土は褐灰色砂礫土、ベース土は青灰色砂質土ないし砂礫土である。出土遺物はない。

土坑・竪穴状遺構

SK1(第10図) 2区において検出した。SE2を切る。平面は長軸約1.1m、短軸0.8mの楕円形である。深さは0.3mである。出土遺物はない。

SK2(第5図) 2区において検出した。平面形は長軸約1.2m、短軸0.7mの不定形な楕円形である。深さ0.4mを測る。遺物は土師器が出土している。

SK3(第10図) 2区において検出した。SD1に切られる。平面形は遺構の東側が調査区外となるものの径約1mの円形を呈すると考えられる。深さは0.5mを測る。出土遺物はない。

SK4(第11図) 2・3区にかけて検出した。平面形は遺構の西側が調査区外となるものの径1.5mの円形を呈すると考えられる、深さは0.4mを測る。遺物は土師器、中世土師器皿、肥前磁器、有孔円盤状の木製品(第14図31)が出土している。

SK5(第11図) 3区において検出した。SK6を切る。平面形は西側が調査区外となるものの現長の長軸で1.4mの楕円形を呈すると考えられる。深さ0.1mを測る。出土遺物なし。

SK6(第11図) 3区において検出した。SK5に切られる。平面形は長軸1.8m、短軸で1.6mのやや不定形な隅丸方形の竪穴状遺構である。深さは検出面より0.5mを測る。覆土は上位が濁暗褐色砂質土、下位は暗灰褐色粘質土。遺物は須恵器坏身(第14図27)、中世土師器皿、珠洲の甕・播鉢が出土している。

SK7(第6図) 4区において検出した。平面形は長軸約2.5m、短軸2mの楕円形を呈すると考えられる。深さは検出面より1mである。遺物は須恵器の甕、土師器皿、珠洲の甕・播鉢が出土している。

SK8(第12図) 4区において検出した。平面形は一辺3.2mの隅丸方形を呈する竪穴状遺構である。深さは検出面より0.6mを測る。P11に切られる。SD2との切りあい関係は不明。掘削途中では北側半分に大小の礫が廻るように検出された。遺構の縁には30～40cm大の礫を配置して、その前面に拳大の小礫が認められた。その後、小礫を崩落のものと判断して取り除き、遺構縁に廻る礫の下段とみられる礫を検出した。礫積みは2段から3段程度認められ、礫の平坦面を内側にむけて据えられているものもある。遺構平面図ではその礫を参考にして下端の推定ラインを示した。礫積みを確認できなかった、遺構の南側東部分は礫の抜き取りの可能性もある。また、調査後の検討ではSK8に切りあい関係が認められる可能性があり、そのために遺構壁の崩落を防ぐための礫積みであった可能性もあることを指摘しておきたい。ただ、礫積みの範囲が切りあいの認められるような、範囲よりも広く積まれていることにも留意しておきたい。覆土はおおまかに上位が褐灰色砂質土、中位が木片を多く含む暗灰色系の粘質土、下位は暗灰色砂質土である。遺物は中世土師器皿、珠洲の甕・壺・播鉢、越前、青磁碗、削物がある。(第13図1～13、第14図38) そのうち、完形の中世土師器皿、珠洲の小壺、列物容器が遺構底面近くで出土した。

溝

SD1(第11図) 2区において検出した。SE3、SK3を切る。幅は1.5m～4.2m、深さは検出面から0.4mを測る。遺物は肥前磁器碗(第13図19)が出土している。

SD2 4区において検出した。SK8との切りあい関係は不明。深さは検出面より0.1mを測る。出土遺物はない。

SD3 5区において検出した。SD4に切られる。幅は0.5m～0.7m、深さは検出面より0.1mを測る。試掘坑よってきられ、全様は不明。覆土は濁暗褐色砂質土。遺物は白磁皿(第14図26)、珠洲の壺、肥前

磁器の小坏が出土している。

SD4 5区において検出した。幅は1.0m～1.2m、深さは検出面より0.1mを測る。覆土は褐色砂質土である。遺物は青磁皿（第13図15）、図示していないが中世土師器皿、珠洲の甕が出土している。

SD5（第7図）6区において検出した。幅4.8m～5.4m、深さは検出面より0.3mを測る。遺物は図示していないが、須恵器、珠洲の搦鉢・甕が出土している。

その他（ビット・不定形、不明遺構）

P1（第5図）1区において検出した。平面形は径0.7mの不整形円形。深さは検出面より0.26mである。柱根が残っていた。出土遺物はない。

P2（第5図）1区において検出した。平面形は長軸1.2m、短軸1.0mの楕円形を呈する。深さは検出面より0.22mを測る。SB1を構成する。柱根が残っていたが、出土遺物はない。

P3 1区において検出した。平面形は長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形。深さは検出面より0.75mを測る。柱根が残っていたが出土遺物はない。

P4（第5図）2区において検出した。平面形は長軸で1.1m、短軸で0.6mの楕円形を呈する。深さは検出面より0.4mを測る。出土遺物はない。

P6（第10図）3区において検出した。平面形は長軸1.1m、短軸1.0mの楕円形。深さは検出面より0.32mを測る。遺物は小片のため、図示していないが瀬戸の天目茶碗が出土している。

P7（第6図）3区において検出した。平面形は東側が調査区外であるが、径1.4mの円形と考えられる。柱根が残っているが、柱穴にしては規模が大きいが、出土遺物はない。

P9（第6図）4区において検出した。平面形は径0.9mの不定楕円形を呈する。深さは検出面より0.26mである。遺物は土師器、中世土師器皿、珠洲の甕（第13図14）が出土している。

P10（第6図）4区において検出した。平面形は径0.8mの円形を呈する。深さは検出面より0.25mを測る。出土遺物はない。

P12（第6図）5区において検出した。平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの不定楕円形である。深さは検出面より0.25mである。遺物は越中瀬戸の皿、珠洲の甕が出土している。

P14 7区において検出した。平面形は径0.4cmの円形を呈する。深さは検出面から0.36mを測る。柱根が残っていたが、出土遺物はない。

SX1（第11図）3区において検出した。平面形は東側が調査区外で不明である。現長の長軸で2.7mを測る。深さは検出面より0.48mである。遺構断面や底面の観察から複数の遺構の切りあいがある可能性がある。出土遺物はない。

SX2 5区において検出した。平面形は長軸3.1m、短軸0.2mの不定形な溝状である。深さは検出面から0.15mを測る。覆土は灰黄褐砂質土。遺物は青磁碗（第13図20）が出土している。

第3節 遺物（第13～15図）

土器・陶磁器

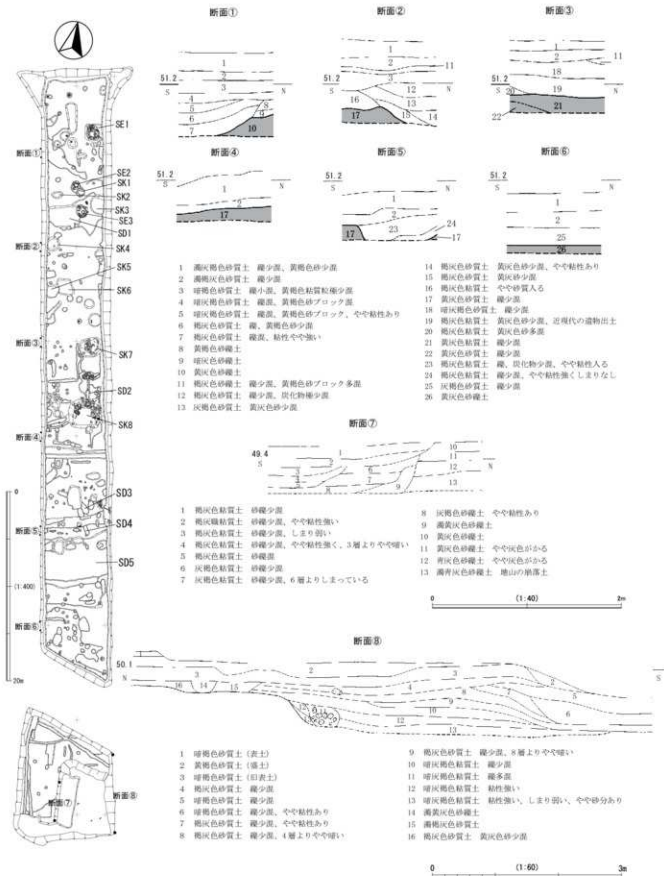
1～13はSK8の出土である。1～5は中世土師器の小皿で口径8～9cm、器高2cm前後である。形態はやや丸み帯びた底部から軽い稜をもって体部が直立気味に立ち上がる。円盤状の底部に粘土紐をのせて成形したものであり、接合痕が認められる。1、4には油煙痕が認められる。類例は二宮川沿いの新庄遺跡、大槻ブロンズ遺跡、邑知湯周辺の四柳白山下遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡などにみられる。6、7は中世土師器皿の中皿で口径10～12cm、器高3cm前後である。体部下半の弱いナデによりやや屈曲する。図示したもの以外も観察すれば屈曲度合いは個体差があるようにみえる。8・9は珠洲焼の甕。8は方頭の短頸でくの字に折れ曲がる口縁。9は方頭の長頸でくの字に折れ曲がる口縁。時期は

ともに珠洲編年のⅣ期。10、11は珠洲の播鉢。10は水平口縁で、卸目が体部下半より施されるもの。時期は珠洲編年のⅣ期。11は卸目が密ではなく間隔をあけて施されている。単位当たりの卸目は12条。12は珠洲で完形の小壺である。やや歪みがみられ、粘土紐積み上げの痕跡を残すやや雑な造り。底部は静止糸切り。時期は珠洲編年のⅣ期～Ⅴ期。13は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗である。釉の発色は悪く灰色味が強い。時期は13世紀中頃から14世紀前半。

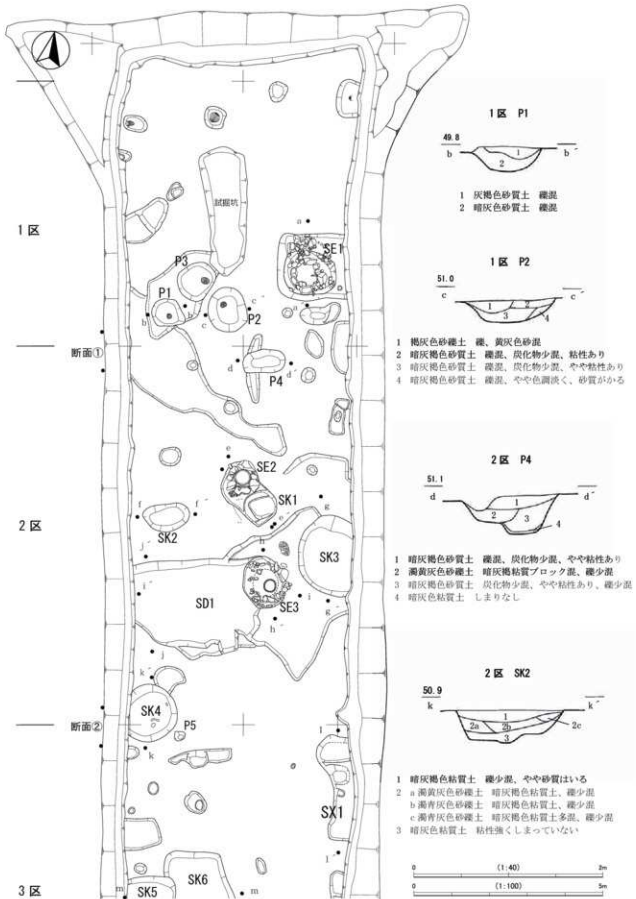
14はP9出土の珠洲の甕。口縁はやや丸みを帯びた方頭の長頸である。時期は珠洲編年のⅢ期。15はSD3出土の同安窯系の青磁皿。焼成は良好で釉はガラス質で光沢がある。内面には窠による文様とジグザグ状の柳点描文を有する。底部は露体である。時期は12世紀中頃から13世紀前半。16はSE2出土の中世土師器皿。平底で体部下半をナデにより屈曲させ、口縁部に向かって器壁は厚くなる。17、18は越中瀬戸。17は向付、18は皿で削り出し高台で鉄軸が施される。時期は16世紀末～17世紀初め。19は肥前系の磁器碗で蛇の目軸刺ぎ。時期は18世紀。20は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗。釉の発色はよく鮮やかである。時期は13世紀中ごろ～14世紀前半。21は肥前の刷毛目文の皿。22は肥前の広東碗。時期は18世紀末から19世紀初頭。23は肥前の陶器碗。24、25は弥生土器。26は体部下半が露体の口禿げの白磁皿である。時期は13世紀後半から14世紀前半。27は須恵器坏身である。

石製品・木製品

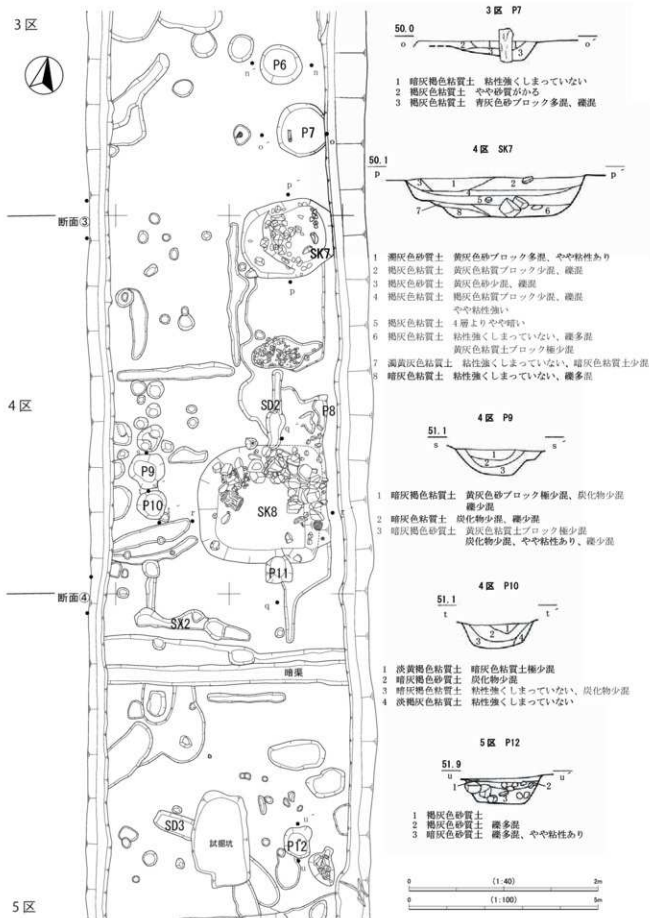
28は漆器碗で高台が高く腰が張る。内外面ともに赤漆塗りである。29はSE1より出土した凝灰岩の上臼である。白面径は25.3cm、高さ11.5cm、芯棒受けは径3cmを測る。供給口径は3.2cmでノミ痕を残している。挽き木の挿入口は対角線上に2箇所あり、方形で深さは3.6cmを測る。目はすり減っているために5分画までしか確認できない。全体的に被熱してもろく剥離部分が多い。30は基石だろうか。色調は暗灰色。31は中心に穴が開いたリング状の木製品。用途はわからない。32～35は柱根ですべて芯持ち材。32は下部側面を削りこみ細身にして、底は芯に向かって削られている。33、34は側面の加工痕はなく、底のみ芯に向かって削られている。35は最も大型で、下部側面を削り、外面から方形の孔が2か所穿たれて貫通している。大型であるために木材運搬時に縄を掛けたと推測される。36はSE2水溜めの曲物である。側板の補強のために上下縁にタガを巻きつける。タガにはキメカキがみられる。側板は9段綴じ、タガ上段は6段綴じ、下段は8段綴じである。側板内面には平行ケビキ、下半は漆塗りが認められる。底部外周には釘穴がみられるため、容器からの転用と考えられる。37はSE3水溜めの曲物である。側板半分を欠損している。内面には平行ケビキがみとめられる。容器からの転用と考えられる。38はSK8底面より出土した刳物である。一木を半裁して削りぬいたもので、加工痕が内外面ともに残り、作りが粗雑である。形態は弥生から平安にかけてみられる槽に近似するが中世の遺物と同伴関係にある。



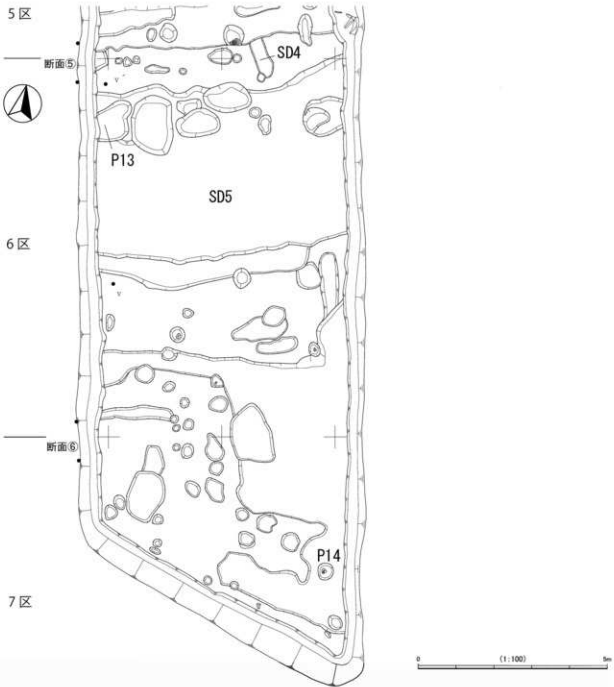
第4図 調査区全体図 (S=1/400)・調査区断面図 (S=1/40・60)



第5図 遺構平面図 (S=1/100)・遺構断面図 (S=1/40)



第6図 遺構平面図 (S=1/100)・遺構断面図 (S=1/40)



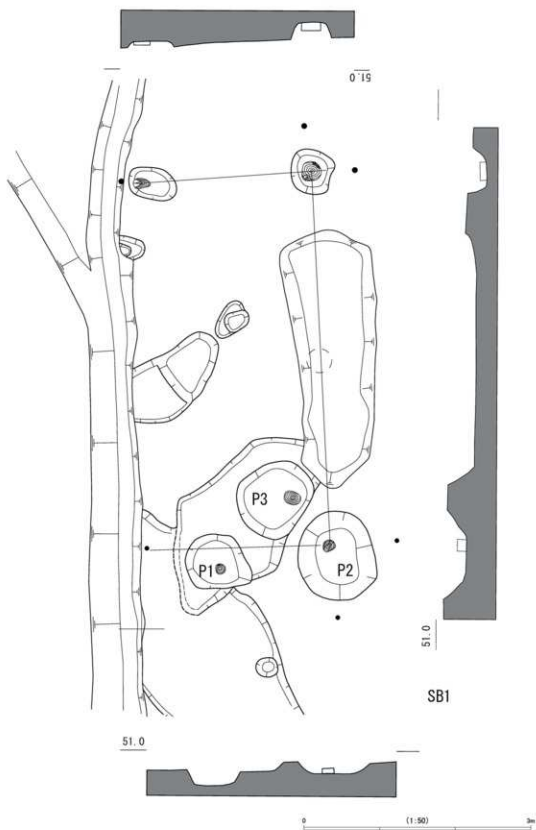
50.8
V



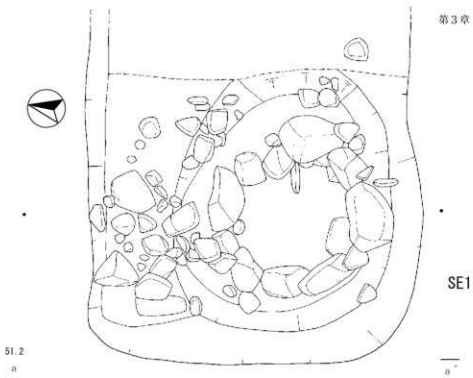
6区 SD4・P12

- | | | | |
|----------|----------------|-----------|----------------------|
| 1 褐灰色砂質土 | 礫少量 | 6 灰褐色粘質土 | やや砂質入る、粘性やや強い |
| 2 褐灰色粘質土 | 青灰色砂ブロック少量、礫少量 | 7 暗灰色砂質土 | |
| 3 暗灰色粘質土 | 青灰色砂ブロック少量、礫少量 | 8 褐灰色砂質土 | 礫少量、やや粘性あり、1層と色調近似する |
| 4 黄褐色砂質土 | | 9 褐灰色粘質土 | 粘性やや強くしまり弱い、礫少量 |
| 5 灰褐色粘質土 | 黄灰色砂ブロック混 | 10 暗灰色砂質土 | 礫混 |

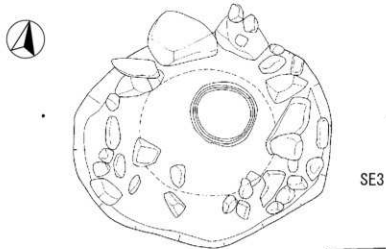
第7図 遺構平面図 (S=1/100)・遺構断面図 (S=1/40)



第8図 SB1 遺構平面・エレベーション図 (S=1/50)



51.2
a



2区 SE3 断制断面

1 暗灰褐色粘質土 青灰砂多混

ベース

A 青灰色砂質土

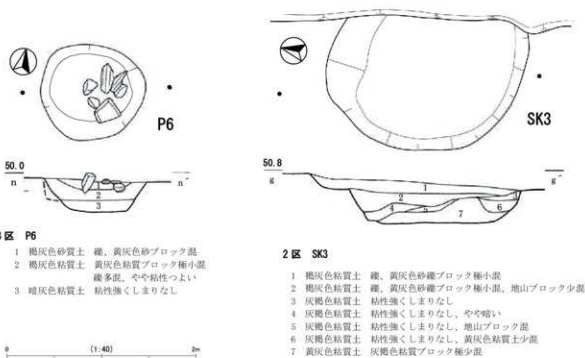
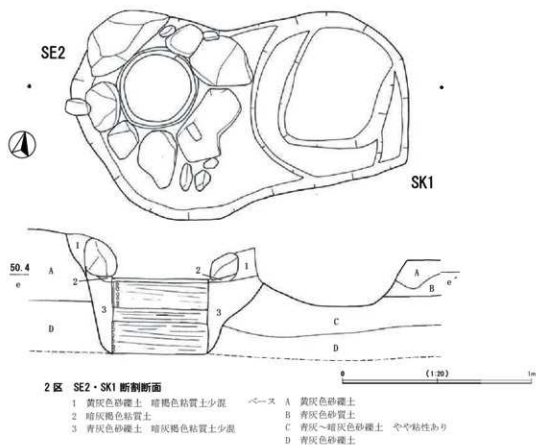
B 青灰~暗灰色砂礫土 やや粘性あり

C 青灰色砂礫土 砂多い

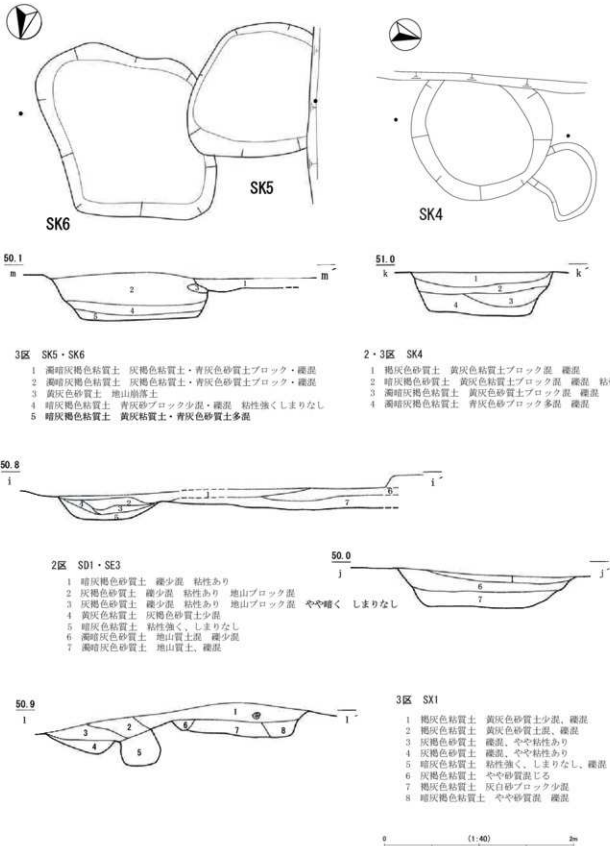
D 青灰色砂礫土 礫多い

第9図 SE1・SE3 遺構平面・断面図 (S=1/20)

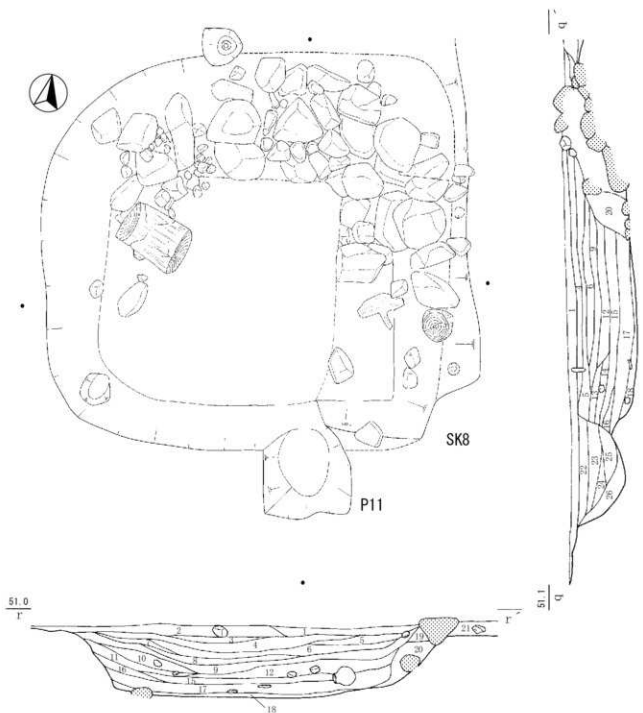
0 (1.20) 1m



第10図 遺構平面・断面図 (S=1/20・1/40)



第11図 遺構平面・断面図 (S = 1/40)

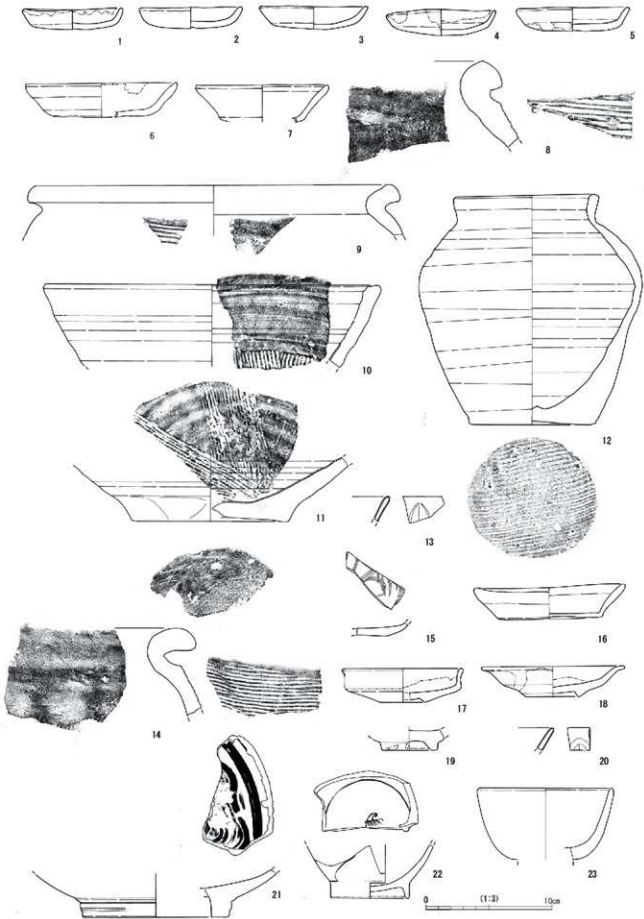


4区 SK8・P11

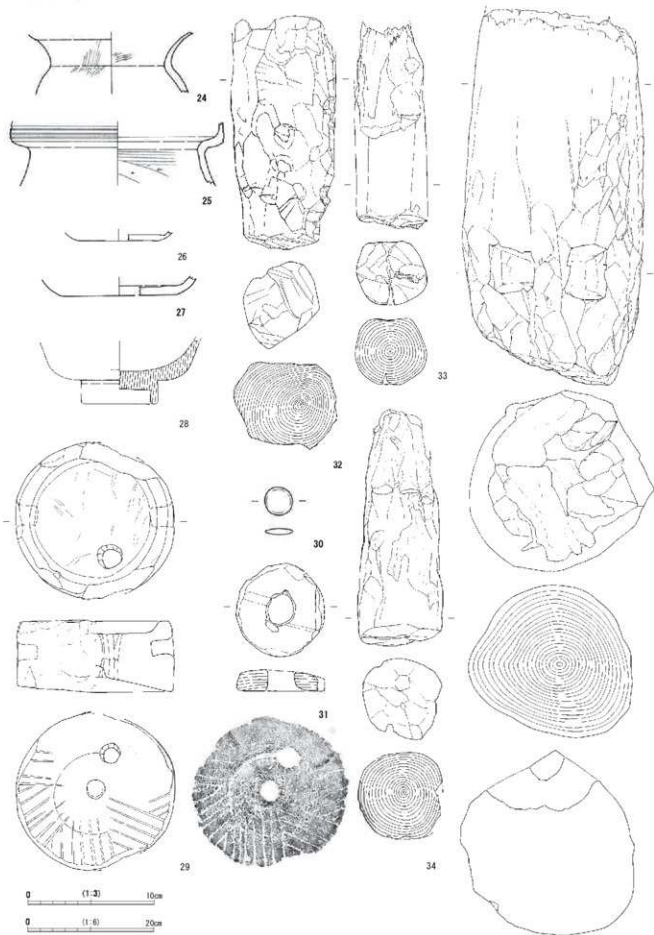
- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1 鶏灰色砂質土 礫混 | 14 鶏灰色粘質土 13層に比べてやや暗い 地山ブロック種小混 |
| 2 鶏灰色砂質土 礫混、炭化物少混 | 15 暗灰色粘質土 木片少混、粘性強い、11層より暗い |
| 3 鶏灰色粘質土 礫混 | 16 鶏灰色粘質土 |
| 4 鶏灰色粘質土 礫混、やや砂質混じる | 17 暗灰色粘質土 木片少混、粘性強い、やや褐色強い |
| 5 鶏灰色粘質土 礫・木片混 | 18 黄褐色粘質土 雑多混、やや粘性あり |
| 6 鶏灰色粘質土 礫混、炭化物少混、木片少混 | 19 暗灰色粘質土 礫少混 |
| 7 鶏灰色粘質土 灰褐色砂粒状に少混、炭化物少混 | 20 暗灰色粘質土 礫混、粘性強い、やや暗い |
| 8 暗褐色粘質土 木片混、粘性やや強い | 21 暗灰色砂質土 礫混 |
| 9 暗褐色粘質土 木片・礫混、やや砂質混じる | 22 暗灰色粘質土 礫混、黄灰色砂混 |
| 10 暗褐色粘質土 木片・礫混、やや砂質混じる、やや粘性強い | 23 暗褐色粘質土 礫混、黄灰色砂少混 |
| 11 暗褐色粘質土 木片・礫混、やや砂質混じる、やや砂質強い | 24 暗褐色粘質土 礫混、黄灰色砂少混 |
| 12 暗褐色粘質土 木片少混、粘性強い、やや灰色強い | 25 暗灰色粘質土 粘性強い |
| 13 暗褐色粘質土 | 26 暗灰色粘質土 黄灰色砂粒状に混 |

第12図 SK8平面・断面図 (S=1/30)

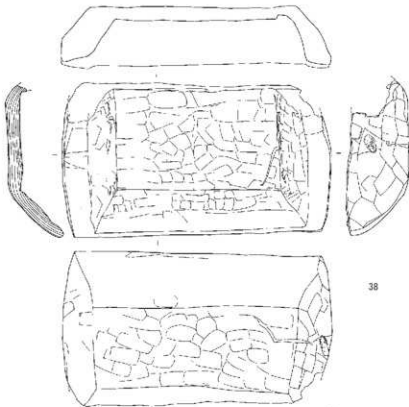
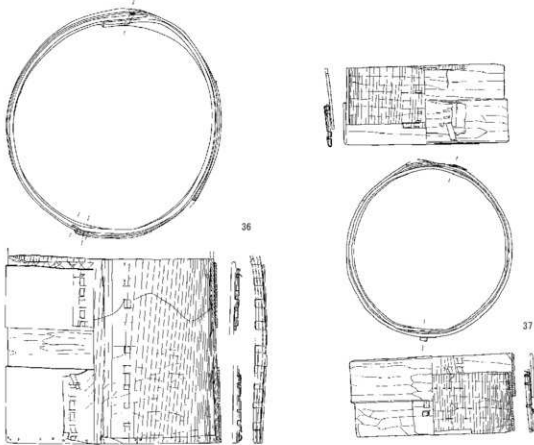
0 (1:30) 1m



第13図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第14図 出土遺物実測図2 (S=1/3, 29、32~35は1/6)



第15図 出土遺物実測図3 (S=1/8)

第2表 土器・陶磁器観察表

報告 番号	実測 番号	種類 器種	出土地点	質量 (cm)			色調		胎土	焼成	調整		備考	調査時 遺構番号
				口径	底径	器高	内 (輪部)	外 (素地)			内	外		
1	D2	土師器 皿	SK10	7.7	6.1	1.7	灰白	灰青	粗砂 少 炭屑含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ、 ナデ		54号
2	D9	土師器 皿	SK10	7.8	7.0	1.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗砂 中	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ		54号
3	D6	土師器 皿	SK10	8.3	7.1	1.8	黄灰～灰白	灰白色	礫、粗砂 少	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ		54号
4	D3	土師器 皿	SK10	8.4	7.6	2.1	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗砂 多 炭屑 少	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ		54号
5	D4	土師器 皿	SK10	8.7	7.8	1.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗砂 少 礫 少	良	ナデ	ナデ		54号
6	D10	土師器 皿	SK10	12.0	7.6	2.7	灰黄褐色	緑灰黄	粗砂 多 礫 多い	良	ナデ	ナデ		54号
7	D28	土師器 皿	SK10	10.4	6.8	(2.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗砂 多い	良	ヨコナデ	ヨコナデ		54号
8	D27	珠洲 壺	SK10	-	-	5.1	灰	灰	粗砂 多 海面骨針含む	良	ナデ、 タタキ	ナデ、 タタキ		54号
9	D7	珠洲 壺	SK10	(28.1)	-	-	灰	灰	粗砂 少 海面骨針含む	良	ナデ、 タタキ	ナデ、 タタキ		54号
10	D5	珠洲 壺鉢	SK10	26.5	-	6.5	灰	灰	粗砂 少 海面骨針含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ		54号
11	H18	珠洲 壺鉢	SK10	-	12.4	(5.1)	灰白	灰白	礫、粗砂 多 海面骨針含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ		54号
12	D1	珠洲 壺	SK10	10.9	10.1	18.2	灰	灰	礫 少、粗砂 多 海面骨針含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ		54号
13	D20	青福 瓶	SK10	-	-	1.8	灰オリーブ	灰	製煉	良			龍泉系	54号
14	D6	珠洲 壺	P9	-	-	(6.0)	灰	灰	粗砂 少 海面骨針含む	良	ナデ、 タタキ	ナデ、 タタキ		193号
15	D13	青福 皿	SD3	-	-	1.1	オリーブ灰	灰	製煉	良			同系 I b類	129号
16	D14	土師器 皿	SE2	11.6	8.4	2.8	淡黄	黄褐色	粗砂 多い	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ		47号
17	D19	基中瀬戸 向付	遺構検出	9.2	3.6	2.7	灰青	灰青	粗砂 多い	良	ロクロナデ	ロクロナデ、 ケズリ	鉄粒、 削り出し蓋台	
18	D11	基中瀬戸 皿	P7	11.4	4.3	2.4	灰青	灰青	粗砂 少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、 ケズリ	鉄粒、 削り出し蓋台	193号
19	D16	肥前 瓶	SD1	-	4.5	(1.65)	やや青みを おびた白	灰白	製煉	良			蛇の目輪はぎ	29号
20	D12	青福 瓶	P10	-	-	(2.1)	緑灰色	灰青	製煉	良			龍泉系	122号
21	D23	肥前 皿	調査区断面	-	11.4	(4.3)	赤褐色		製煉	良			瀬毛日唐津	
22	D30	肥前 瓶	表土除去	-	6.0	(4.3)	乳白	灰白	製煉	良			広東系	
23	D26	肥前 瓶	表土除去	10.6	-	(5.7)	灰色	灰白	製煉	良			陶体染付の 可能性あり	
24	D17	弥生 壺	P5	-	-	(4.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂、粗砂 含む	良	ハケメ、 ヨコナデ	ハケメ、 ヨコナデ		34号
25	D15	弥生 壺	SD1	-	-	(5.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂、粗砂、 礫含む	良	ハケメ、 ケズリ、 ヨコナデ	ヨコナデ		29号
26	D21	白福 皿	SD	-	-		やや空色の 灰白色	灰白色	製煉	良			灰～2輪 口荒げ	64号
27	D29	弥生器 杯	SK7	-	9.0	(1.5)	灰色	灰色		良	ロクロナデ	ロクロナデ、 ハラキリ		50号

第3表 木製品・石製品観察表

報告 番号	実測 番号	器種	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考	調査時 遺構番号
28	木1	漆器椀	遺構検出	-	6.0	(5.0)		内外面朱漆	
29	石1	石臼	SE1	25.0	25.3	11.5	8.8		6号
30	D22	基石	遺構検出	2.2	2.2	0.5	3.62		
31	木2	有孔円筒 柱木製品	SK4	7.4	6.8	1.7			30号
32	木3	柱根	P1	37.0	16.7	14.9			51号
33	木4	柱根	P6	32.7	11.7	10.5			44号
34	木5	柱根	P12	37.6	13.5	13.65			192号
35	特1	柱根	P3	59.55	28.8	29.3			27号
36	特2	壺物	SE2					口径 44.0 器高 38.9	47号
37	特4	壺物	SE3					口径 35.0 器高 16.7	46号
38	特3	樽	SK10	57.1	32.9	13.1			54号

第4章 総括

SK8（竪穴状遺構）の遺物について

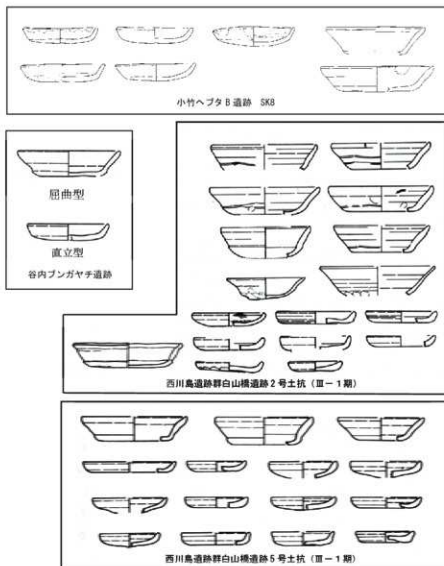
当遺構からの出土遺物は破片数で121点になり、遺跡全体での土器・陶磁器破片数の2分の1以上になる。その内訳は土師器皿58点、珠洲58点、青磁1点、越前4点である。遺構底面付近では珠洲の甕（第13図9 18層）・小壺（第13図12 17層）・土師器皿（第13図35 18層）、刎物容器（第15図38）が出土した。ここでは出土遺物の検討を進め、土師器皿の編年の位置について考えてみたい。

土師器皿は口径が8～9cm、器高2cm前後の小皿、口径が10～12cm、器高3cm前後の中皿の2量法がみられる。形態は小皿が丸みを帯びた底部から、体部が直立気味に立ち上がるもの、中皿は底部が平底で、体部下半をナデによりやや屈曲させたものがある。小皿には油煙痕が確認できるものがある。この形態は谷内ブンガヤチ遺跡での土師器皿の形態分類によれば、小皿が直立型、中皿が屈曲型に相当し、時期は15世紀前半かそれ以前と想定されている。（滝川1995）また、西川島遺跡群による能登の土師器皿編年によればⅢ-1期（13世紀末～14世紀前半）に相当して、やや時期差が生じているのが現状である。（四柳1987）この時期差について滝川重徳氏は形態が必ずしも一致するもの

のではなく、地域性の差異とも考えられるが、むしろ時期差を想定すべきと述べられている。

SK8での土師器皿の共伴遺物（第13図8～13）には珠洲の甕・壺・播鉢と青磁の蓮弁文碗がある。甕（第13図9）は最下層（18層）の遺物で口縁形態は方頭でくの字に折れ曲がるもの。鉢（第13図10）は鉾目が下半に入るもの。壺（第13図12）はやや歪みがあり、粘土紐痕がのこるやや雑な造りである。以上の共伴遺物の時期は14世紀中葉から後葉にかけての遺物群であるとみられる。

今後は資料の増加をまちこの形態の時期幅や地域差を含めて検討する必要がある。



第16図 土師器皿の形態 (S = 1/3) 0 (1-3) 10cm

まとめにかえて

調査区は石動山麓にあたる扇状地上の緩斜面に立地している。現在の小竹地区の一面を占め、前面は東往來が通る。山麓部は大小の扇状地が入り混じって形成されており起伏が激しく、扇端部の各所には伏流水と表層水を貯水したとみられる灌漑用の水溜（堤）が分布している。東往來筋には家並みがつらなり古い町並み景観を残している。

本調査では、概ね13世紀から15世紀前半の集落跡を検出した。その中心時期は14世紀と考えられる。遺跡を性格づけるような、道路状遺構（往來筋に比定されるような）は検出されなかったが、掘立柱建物や柱根が残存する柱穴、井戸、土坑、堅穴状遺構などの分布から居住域の中心は1～4区あたりと考えたい。また径1m以上の土抗（SK3・SK4）や堅穴状遺構（SK6・SK8）が目立つのも特徴である。礫積み認められたSK8では別物容器や珠洲小壺など貯蔵具が出土していることも遺構の性格を考える上で重要である。溝は調査区を分断するような東西方向のものが認められる。（SD1・5）SD5から南は遺構密度が希薄になることから集落域を区切る溝としての機能が考えられる。

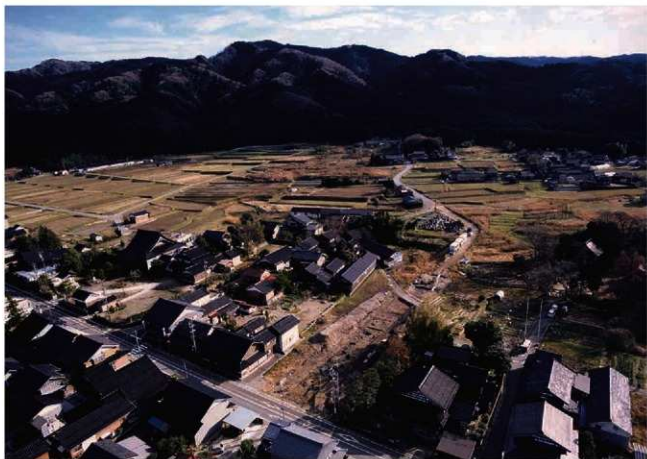
【付】 出土点数は全体でも202点と少ないが、中世土器・陶磁器の破片点数を以下の表にして示した。

第4表 中世土器・陶磁器組成

土器器皿	珠洲 (47.4%)			越前 (13.7%)		瀬戸美濃	青磁	白磁	染付	合計
	甕・壺	播鉢		甕・壺	播鉢	天目	碗	皿	碗	
75	89	20	11	0	2	3	1	1	202	
37.1%	44.1%	9.9%	5.4%	0%	1.0%	1.5%	0.5%	0.5%	100.0%	

参考・引用文献

- 岩井宏実 1994 『曲物 もと人間の文化史』法政大学出版局
- 柿田祐司 2006 『加賀・能登の様相』『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 川畑 誠 1996 『北陸地方の木製食器の概要』『古代の木製食器—弥生から平安期にかけての木製食器—』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 川畑 誠¹² 2005 『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 白田義彦 2006 『中能登町 新生遺跡』石川県教育委員会 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2010 『沖繩における12～16世紀の貿易陶磁—中国産陶磁を中心とした様相と組成—』『貿易陶磁研究 no.30』貿易陶磁研究会
- 高橋勝喜・浜岡賢太郎・橋本澄夫・吉岡康暢 1966 『第三章 考古資料』『鹿島町史 資料編』鹿島町
- 滝川重徳 1995 『第9節 谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について』『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 田村昌宏 2001 『大町ゴンジョウ遺跡』『石川県埋蔵文化財情報 第6号』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 東四柳史明 1985 『第3章 中世』『鹿島町史 鹿島町』
- 1995 『第二章 第2節 中世』『歴史の道調査報告書 第二集 能登街道Ⅰ』石川県教育委員会
- 藤田邦雄 1997 『中世加賀の土器器様相』『中近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 宮川勝次 2001 『大町ダイジツウ遺跡』『石川県埋蔵文化財情報 第6号』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 三輪茂雄 1978 『白 もと人間の文化史』法政大学出版局
- 向井祐知 2007 『加賀・能登の様相』『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・施軸陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊XV—陶磁器分類編』太宰府市教育委員会
- 四柳嘉章 1997 『能登国における土器器皿の編年』『中近世の北陸』北陸中世土器研究会 桂書房
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



遺跡周辺の景観（北から）



遺跡周辺の景観（東から）



遺跡完掘状況（北から）



SK8 遺構完掘状況（南から）



1区 遺構完掘状況 (西から)



2区 遺構完掘状況 (西から)



2区 遺構完掘状況 (西から)



3区 遺構完掘状況 (西から)



4区 遺構完掘状況 (西から)



4区 遺構完掘状況 (西から)



5区 遺構完掘状況 (西から)



5区 遺構完掘状況 (西から)



6区 遺構完掘状況 (西から)



7区 遺構完掘状況 (西から)



8区 遺構完掘状況 (北西から)



SE1 遺構完掘状況 (東から)



SE2・SK1 遺構完掘状況 (東から)



SE2 遺構完掘状況 (西から)



SE2・SK1 たちわり断面 (西から)



SE1 曲物出土状況



SE3 遺構完掘状況



SE3 曲物出土状況



SE2・SK1・SE3 たちわり状況 (南から)



SK3 遺構断面 (西から)



SK4 遺構断面 (東から)



SK6・SK5 遺構断面 (北から)



SK6・SK5 遺構完掘状況 (北から)



SK7 遺構断面 (東から)



SK7 遺構完場状況 (西から)



P1 柱根出土状況



P2 柱根出土状況



P14 柱根出土状況



SK8 東西断面 (南から)



SK8 東西断面 (南から)



SK8 南北断面 (西から)



SK8 南北断面 (西から)



SK8 薪物出土状況



SK8 珠洲焼出土状況



SK8 遺物出土状況



SK8 土師器皿出土状況①



SK8 土師器皿出土状況②



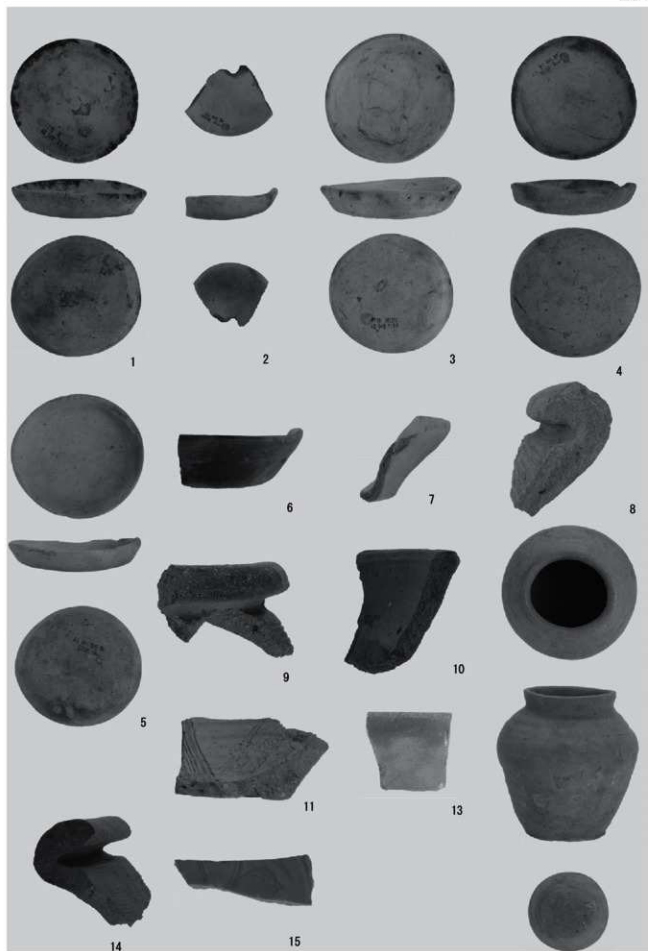
SK8 土師器皿出土状況③

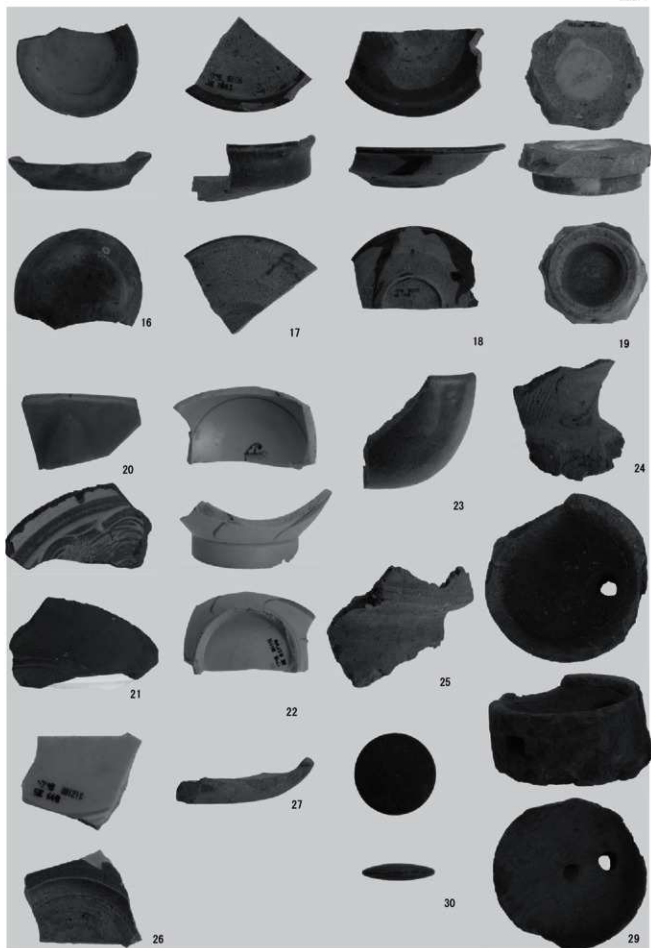


SK8 土師器皿出土状況④

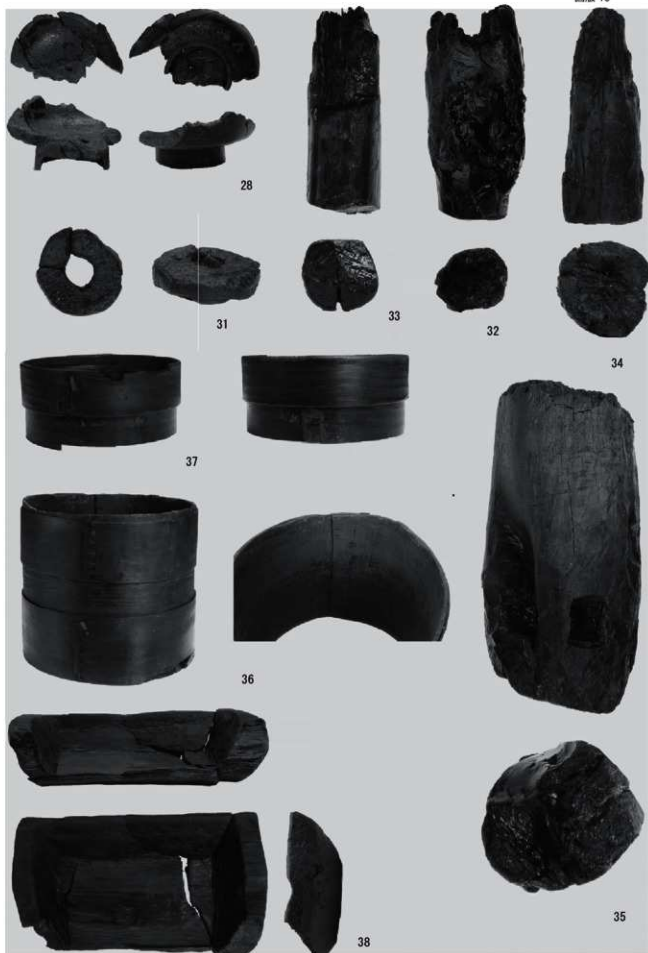


SK8 土師器皿出土状況⑤





出土遺物 2



出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	おだけへふたBいせき							
書名	小竹ヘブタB遺跡							
副書名	県単道路改良事業一般県道良川磯辺線に係る埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷内明央、坂下博晃							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477 FAX076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会 財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
おだけへふたB遺跡	石川県 中能登町 小竹地内	10477	-	36度 57分 28秒	136度 54分 9秒	20091027 ～ 20100115	700㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小竹ヘブタB遺跡	集落	中世	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、小穴	中世土師器皿、珠洲焼、越前焼、越中瀬戸、青磁、白磁、木製品、石製品				
要約	石動山系の麓にあたる扇状地上の緩斜面に立地した中世の集落。13世紀から15世紀前半にかけての掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸、土坑などを検出している。竪穴状遺構（SK8）からは完形の土師器皿、珠洲焼、列物容器が遺構底面付近で出土した。遺跡は現在の小竹集落と重なるように形成されている。							

中能登町 小竹ヘブタB遺跡

発行日 平成23（2011）年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-mabun.or.jp

印刷 鶴川印刷株式会社